

## 北海道考古学からみた蝦夷（エミシ）

石 附 喜 三 男

## 1

日本古代史上に登場してくる蝦夷（エミシ）、とくに今日言う東北地方北半に居住していた彼等がアイヌ系の人々であったか、あるいは和人系であったかについての議論は、今なお必ずしも解決のついた問題とは言えないであろう。そこで本論は、北海道考古学の立場からみて、蝦夷（エミシ）をどのように考えることができるかという私見を、ここに披瀝したいと考える。

ここに改めて言うまでもないことであろうが、同じ『蝦夷』の文字を用いて「エゾ」と訓じる場合も多い。そして、近世においてエゾ（蝦夷）とは明らかにアイヌの人々を指した。それ故、北海道の地は、明治二年（一八六九）に北海道と名が改められるまでは蝦夷地と呼ばれた。

いったい、エゾの語の確かな出現は、平安時代末期の和歌にある<sup>1)</sup>とされる。管見の限りでは、藤原顕輔による長承元年（一一三二）の『浅ましや千島のえぞの尽るなるとくきのや社隙はもるなれ』<sup>2)</sup>がその初出である。以後、「えぞ」を詠みこんだ和歌は鎌倉期にかけていくつも見られるようになる。そこで、それまで「エミシ」と訓じられていた蝦夷の訓みとして「エゾ」がとって代っていったことは、例えば延文元年（正平十一年）（一二五〇）に成った『諏訪大明神画（絵）詞』中の「蝦夷カ（が）千島」の字句が、先述の如き平安末、鎌倉期

の和歌にみえる『千島のえぞ』あるいは『えぞが千島』と対比して「エゾがチシマ」と読まれるべきであろうこと、さらに後世には蝦夷が間違いないく「エゾ」と読まれていることなどからみて確かなことと言ってよいであろう。

ただ、エミシにしてもエゾにしても、その語源については諸説あり、またそれらの解説ないし解釈は筆者の手に負いかねることである。さらに、同じ『蝦夷』の字を用いながらも、エゾの場合にはアイヌの人々を指すことに大方の異論がないけれども、エミシの場合にはアイヌ系の人々を指すとする説<sup>3)</sup>、及びそれが陸奥の、中央政権に対して「まつろわぬ」人々を指すもので、アイヌが含まれるか否かは本来関係のない概念であるとする説<sup>4)</sup>（と言うことはエミシに和人系の人々が含まれていても当然ということになる）とに分れるのである。

そこで、エミシがアイヌであるならば、蝦夷は一貫してアイヌであり、ただ、何故にある時点でエミシからエゾへの訓みの転換が行なわれた<sup>5)</sup>かが問題となる。一方、後者の場合にはある時点においていかなる理由で、もしくは事情で、概念の転換が生じたかが問題となる。こうした諸問題にしても、現状では必ずしも納得のいく説明は得られていないように私には思われる。

それはともかく、本論で私が取り扱いたいと思うのは、冒頭に述べたように、北海道考古学の立場からして、「エミシ」というものが私なりにどのように捉えられるかということなのである。そして、それ

はエゾという訓みの出現以前の『蝦夷』に関するものであることをま  
ずお断りしておきたいと思う。

## 2

おそらくは北海道の地が、蝦夷との関りにおいて登場する最初の史料は、『日本書紀』の斉明天皇四年(六五八)から六年にかけての所謂“阿倍比羅夫北征”の記事である。それらの内容はここに詳説するまでもないが、越国守の阿倍引田臣比羅夫が船軍を率いて日本海を北上し、鰐田(鮑田)・淳代・津軽・渡嶋等の蝦夷や肅慎を伐ち、あるいは交渉をもつというものである。

鰐田(鮑田)は今日の秋田、淳代は同じく能代、そして津軽も同じく津軽地域であろう。こうした秋田県から青森県にかけての現在の地名と対比し得る諸地域の比定に関しては、大方の間に異論はないであろう。問題は渡嶋をどことする<sup>6)</sup>かである。それは、渡嶋を北海道とする多くの見解が存するものの、一方では、渡嶋を本州のうちに求めようとする意見もまたみられる<sup>7)</sup>からである。

私も近年、いく人もの先学が主張しておられるように、渡嶋を北海道としてよいのではないかと考えている。私なりの理由は以下の如く<sup>8)</sup>である。

一つは、これらの記事における前記諸地名の関り方、順序によるものである。まず、四年夏四月条は、阿倍比羅夫<sup>9)</sup>が船師一八〇艘を率いて蝦夷を伐つ記事であるが、そこではまず鰐田・淳代二郡の蝦夷が降伏し来り、ついで鰐田の蝦夷の恩荷という者に官位小乙上を受け、淳代・津軽二郡の郡領とした。また、有間の浜に渡嶋の蝦夷を召し聚めて饗応したというものである。そこで、ここに登場してくる渡嶋の蝦夷は明らかに鰐田・淳代・津軽の各蝦夷とは異なった地の蝦夷であ

る。また渡嶋は、鰐田・淳代・津軽と対等に対比されるべきレベルの地と感ぜられるし、また、それらの一段と奥に位置する地であるところが自然であろう。

つぎに、六年三月条を見よう。この条は阿倍比羅夫が船師二〇〇艘を率いて肅慎を伐つという記事であるが、この時、阿倍比羅夫の船は道奥の蝦夷を乗せており、かつ大河のほとりに至る。そこで比羅夫軍は渡島の蝦夷に出会い、その渡島の蝦夷から彼等を害する肅慎に対しての救援を求められ、結局は一戦を交えるのである。ここでは渡嶋の蝦夷は道奥の蝦夷と対比されて述べられている。道奥とは、この場合も東北地方のことと考えるのが常識的であろうから、したがって、道奥の蝦夷は、鰐田・淳代・津軽等の各蝦夷の総称的なものと考えたい。ともかく、道奥の蝦夷を船に乗せてさらに奥へと進んだ結果、渡嶋の蝦夷と出会うのであり、さらに渡嶋は肅慎のいる地ということにもなる。

このように、渡嶋の地が津軽地方よりさらに奥へと進んだ土地であるとする点に問題はないと思われるが、果してそれは津軽海峡を越えての北海道を意味するのであるか、あるいは本州のうちに留まるのであろうか。“渡嶋”は一般に“わたりしま”と訓じられている。その語義は、鰐田・淳代・津軽といった、語源はともかくとしてもそれぞれの土地名となっている固有名詞とは異なり、船で渡っていく島(あるいは土地)という普通名詞的な意味合いが強い語として出発したであろう。そのことは、日本海を船で北上してきた阿倍比羅夫軍にとつて、より一層未知の奥地へと進むのに応しい場所の表現でもあろう。津軽地域よりさらに奥へと進むのであれば、津軽海峡を越えて北海道へと渡ったのか、または津軽半島をぐるっと回って陸奥湾内へと入るのか、あるいは津軽半島から平館海峡北部を横切って下北半島のおかずこかへと達するのか、というコースが考えられる。私には、やはり

阿倍比羅夫軍は津軽海峡を越えて北海道の地へと渡った、即ち渡嶋は今日の北海道であるとするのが妥当なように思われる。

いったい、津軽海峡間の最短距離は、太平洋側の大間崎・汐首岬で一八・七km、日本海側の竜飛岬・白神岬で一九・五kmという極めて短かいものである（平凡社大百科辞典『津軽海峡』（昭和六〇年）の項による）。普通に晴れた日であるならば前記諸岬付近のいずれの場所に立っても、対岸は指呼の如くに眺望し得るのである。日本海を北上する対馬海流は分れて津軽海峡に入り、やがて太平洋に出ていくという潮流があるから、日本海沿岸を北上して来た阿倍比羅夫勢にとって、そのまま海峡に進入し、津軽半島の海岸沿いに進路をとることはより容易なことではあったに相違ない。しかし、滅亡した百濟再興の任務のため、斉明七年（六六一）八月には朝鮮半島に派遣された阿倍比羅夫とその水軍<sup>10)</sup>のことである。津軽海峡（実際にはその西方洋上がルートになる）を越え、北海道に到ったとすることは何ら技術的に困難ではなかったと考えられる。また、渡嶋の語義に照しても、そうするのがもっとも素直な解釈のように思えるのである。

ずっと後世のことになるが、十四世紀半ば頃になったとされる文献、『十三往来』<sup>11)</sup>には、津軽十三湊に『夷船京船群集』の記載が見られ、その頃の十三湊に交易のためのエゾの船——その中に当然北海道からのエゾ船があったとみることはその時代性から言って当然であろう——が集っていたことが窺われる。斉明紀四年夏四月条の、有間の浜に渡嶋の蝦夷等を集めて大いに饗応したという記事も、こうしてみれば、津軽海峡越えが当時もさ程困難なことではなかった証左にもなるうか。因みに、“有間の浜”の有間については、私も諸先学の見解ののっと<sup>12)</sup>十三湖付近の“えるま”（江流末、江流澗、江流馬、入間）郡に当ると考える。したがって、有間の浜は十三湊あるいはその付近ということになる。

さてもう一つは、肅慎（みしはせ）についてである。肅慎に関する記載は、斉明紀四年の是歳条、同五年三月条末尾の註記事、同六年三月条にみられる。そして、六年三月条から知られるように、渡嶋は肅慎に關っている場所でもある。また、四年是歳条の内容は、阿倍比羅夫が肅慎を討ち、生きた熊二匹と熊の皮七〇枚を（朝廷に）献上したという短かい記事である。

この四年是歳条にみえる熊とはいかなる種類のクマであろうか。現在、熊の字は、日本においては北海道・千島等に棲息するヒグマを表現するのに用いている。斉明紀においても熊は、やはり本州のツキノワグマとは異なった、それよりも大型で色も褐色味を帯びる、そしてより獠猛な性質をもつ北海道のヒグマを指す、それ故、一般的にクマⅡ熊ではなく熊の字で表わしたものと考えたい。かくして、熊がヒグマであるとした時、四年是歳条は渡嶋Ⅱ北海道に関する肅慎と一体となった内容の記事としてスムーズに受取ることができるように感ぜられる。

では、肅慎とはいかなる人々を指すのであろうか。私は、道奥にせよ渡嶋にせよ、それらの蝦夷と異なるものとして書き表わされている肅慎は、やはり蝦夷とは別の種族ないし民族とすべきであると考え。そして、そのことは次節に述べるように北海道考古学の観点からも説明できるのでないかと考えている。

ともかく、以上見てきたところから、“蝦夷”と呼ばれた人々が東北地方のみならず北海道にも居住していたとすることは確かとしてよいであろう。

## 3

北海道の考古学を論ずる際、念頭を離れない課題の一つは、北海道

の先住民族であるアイヌのそれである。いったい、エゾ（蝦夷）地において松前藩が確立し、アイヌの交易場所である商場（あきないば）が家臣の知行地として設定され、それらがしだいに奥地にまで及んでいくわけであるが（このような交易場所の設置が北海道東部の厚岸<sup>あつけし</sup>には寛文年間（一六六一〜一六七二）、元禄十一年（一六九八）に同じく霧多布<sup>きりちぶ</sup>、宝暦四年（一七五四）には千島の国後島にまで、また寛政二年（一七九〇）に樺太にも及んだ<sup>13)</sup>という）、こうした近世において確かめられるアイヌ民族の居住範囲は、北海道全域は言うまでもなく、千島列島全域、南樺太、本州北端というものであった。本州北端区域は一先ずおいて、千島、樺太におけるアイヌの人々の居住がいつに始ったかという問題は必ずしも明らかとは言えない。が、ともかく、その居住圏の存り方からみて、また、次に述べる観点からして北海道が中心地となることは疑いを容れないところであろう。

そこでまず、アイヌの祖先文化の成立を北海道考古学の上においてどう捉えられるかを概観してみたい。その際、私のとる立場は、あくまでも考古学的立場に基づき、北海道における考古学的文化圏の在り方を追求し、そうした文化圏が後世のアイヌ民族の居住圏とどう連なっていくかの検討ということになろう。

さて、縄文式時代を通じて、北海道は終始二つの文化圏に分れていたと言つてよい。石狩平野までの道南部とそれを越えた道東・道北部とにである<sup>14)</sup>。この傾向は、続く縄文式文化においてもなお引続いてみられる。縄文式文化における各種土器の編年的関係については、なお研究者間に種々の議論があつて必ずしも決着がついていないと言えないが<sup>15)</sup>、それらの問題点を含めておよその概略は次のように述べて差し支えないであろう<sup>16)</sup>。

まず大きく分けて、縄文式文化期前半の道南部にあつては、恵山<sup>えさん</sup>式土器と総称される土器が主体をなす。恵山式土器の初期のものは、

東北地方北端まで広まった弥生文化の土器である二枚橋・田舎館式のグループに酷似する。その後、東北地方北部において弥生文化の土器等の遺物やそれらを出す遺跡の状態が極めて稀薄になるのに対して、北海道南部地域では初期恵山式土器の系統が独自の展開をみせる。この恵山式土器の文化（恵山文化）においては、その初期の土器が東北地方北端の弥生式土器に酷似するといえ、稲作の証跡は今なお認められていないし、また共伴の石器についても、魚形石器や靴形石篋など、やはり本州の弥生文化のそれとは明らかに異なった組成を示す。

道南に恵山文化が広まっていた当時の道東・道北部における土器は、かつて前北<sup>せきほく</sup>式土器と総称された土器である。かつては、この土器グループに属し、かつその中の後半期に編年されるいくつかつかのものか、この土器グループに後統する後北<sup>せきほく</sup>式土器グループに属するものであり、かつ道東・道北部の地方的特色を表わすものと



第1図 江別（後北）C<sub>2</sub>式土器

（江別市坊主山遺跡出土、高19.0cm、底径7.0cm。江別市教育委員会蔵）

して北見型の名を与えられた時期もあった<sup>18)</sup>が、江別市の元江別I遺跡において恵山式土器（それも、この土器を前・中・後期と分けた場合の前期末くらいの時期のもの）と前北式土器の興津式土器の類の両特徴を一個の土器に併せもつものが出土している<sup>19)</sup>ところから、恵山式土器と前北式土器の時間的関係は自ずと明らかになってきている。

また、恵山式土器の後期のものと後北（江別）式土器中の後期の土器であるC<sub>2</sub>式及びD式との間に、両者の表面に付された束状特殊縄文（縄文の条が原体の回転方向に展開する）の存在から時間的連続性を認めようとする考えもある<sup>20)</sup>が——この場合、後北式C<sub>2</sub>・D式土器に先行する同A・B・C<sub>1</sub>式の各土器は恵山式土器と大きく併行関係をもつことになり、それら両者の相違は地域差として解釈される——、これも江別市の江別太遺跡及び旧豊平川河畔遺跡の相伴関係<sup>21)</sup>が正しいとすれば（即ち、恵山式土器の末期のものと後北式土器の初期のそれであるA式が相伴するので）、恵山式土器グループと後北（江別）式土器グループ両者の時間的関係が、移行期における若干の重複はあるものの基本的には前後関係を示すということになる。

このように土器の面から言えば、道南部の恵山式土器グループと道北部の前北式土器グループが、地域を異にしながら大体において併行関係にあったというのが、北海道における続縄文式文化期前半の状況である。

それでは、道南部において恵山式土器グループに続いて後北（江別）式土器のグループが位置するとするならば、一体、道東・道北部の前北式土器グループの次には何が来るのであろうか。私は、やはり基本的には、道東・道北部においても後北（江別）式土器グループが分布するように考えている。

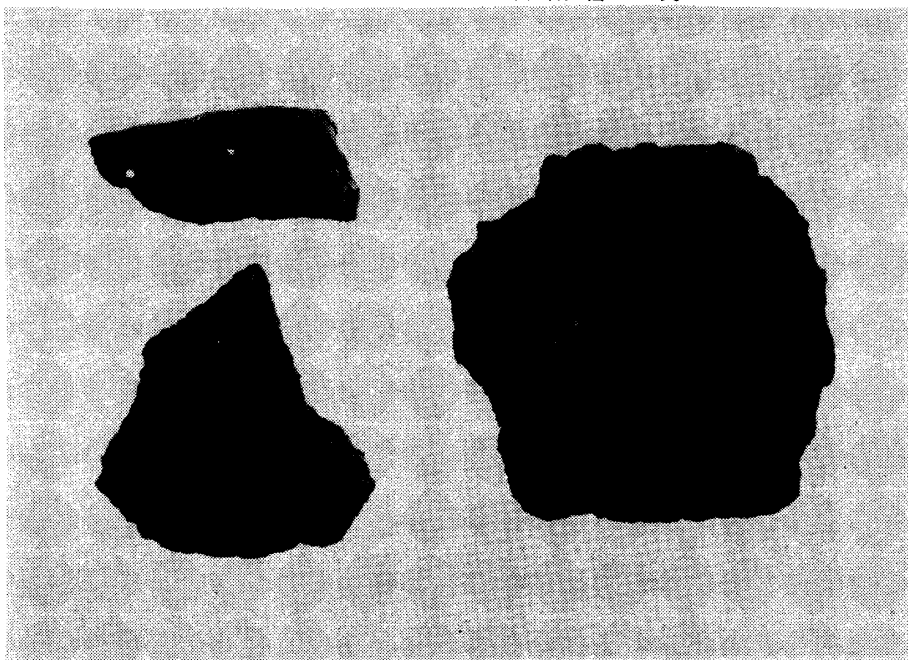
ただ、後北式土器グループの中でその初期に位置するA式及び次のB式の、道東・道北部における分布確認は、現在のところまだ稀薄で

ある。しかし、B式の次のC<sub>1</sub>式になるとその存在は確実なものとなり、さらに末期のC<sub>2</sub>式・D式になるとそれらの分布は揺ぎないものとなる。C<sub>2</sub>式・D式の広まりは、単に道東・道北部にも一円に見られるようになるという程度のものでなく、南樺太にも、また南千島や東北地方北半部一帯にまでも大きく存在を示す<sup>22)</sup>のである。

江別A式土器の成立状況など、まだ不明の点は多いが、それまで伝統的に道南部と道東・道北部との二つの文化圏に分かれていた北海道の文化が一つになるのは、この後北（江別）式土器の文化——私はこれを北海道の続縄文式文化の後半期と位置づける——に至ってからなのである。そして、その文化圏の在り方は、改めて言うまでもなく後世のアイヌ民族の居住圏と大きく重なり合うものである。多少の地方差が認められるにしても、よりマクロな目で見ると後世のアイヌ文化は全体に民族文化としてそれなりの斉一性をもった存在として良いものと思われるが、そうした文化圏の在り方を示すものの最初の成立が、今述べた後北（江別）式土器文化期にあるとしなければならぬ。それはともかくとして、この後北（江別）式土器の文化圏が後世のアイヌ文化圏にストレートに結びつくものか否か、その連続性についてはなお若干の証明が必要である。この点はまた少し後に触れる。

では、この後北（江別）式土器、とくにC<sub>2</sub>式・D式の実年代はいつ頃と考えるべきであろうか。実は、これについても議論が大きく二つに分れる。一つは五世紀頃とする<sup>23)</sup>ものであり、（研究者によってはもう一、二世紀さか上るとする者もある）、もう一つは七、八世紀と新しくするものである。後者の立場は私にとってのもので、これらについても後に概括する。

さて、おそらくこの江別文化（江別式土器文化）が行なわれている時期のある時点で、樺太から異質な文化が北海道へと南下してくる。鈴谷式土器の文化である。北海道におけるその文化圏は利尻・礼文両



第2図 江別市坊主山遺跡出土の鈴谷式土器  
(左上のもので幅約5cm。江別市教育委員会蔵)

島を含む宗谷北端地域であるが、江別市坊主山、札幌市札幌駅北口、余市町フゴッペ洞窟といった北海道中部の諸遺跡にまでそれぞれ一〇数片の少数ながら土器小片の分布が認められる<sup>24)</sup>。この文化を統縄文式文化の地方型とみるか<sup>25)</sup>、あるいは次に述べるオホーツク文化に属するものとするか<sup>26)</sup>、これも意見が分れるところであるが、ともかく、さらに引き続いて樺太から南下し来り、北海道のオホーツク海沿岸に分布

をを広げ、やがて千島列島をもさか上って文化圏とするオホーツク文化の先駆的存在であったことに間違いはない。私は、斉明紀阿倍比羅夫北征記事に見える肅慎ともしかしてこの鈴谷式土器文化人ではなかったかと考えている。前記のように道央部でも散点

的ではあるが土器が出土しており、日本海ぞいにかなり南方まで彼等の行動範囲の広がりが見えるからである。また、実年代比定の面でも、さほどかけ離れたことにはならないと考<sup>27)</sup>える(仮に、肅慎がこの鈴谷式土器文化人に実際に該当するかどうかはさて置いたとしても、少なくともこれを含めて広くオホーツク文化の、樺太から北海道への文化の流れが——それは当然、文化の担い手の移動を伴うものである——斉明紀阿倍比羅夫北征記事に反映しているものと私は考えている)。

オホーツク文化が南樺太から北海道オホーツク海沿岸、知床・根室両半島、そして千島列島に分布していた当時、北海道の大部分の地でこの文化とほとんどの時期に亘って併行関係にあったのが擦文式文化<sup>28)</sup>であった。

擦文式文化は、八世紀代の強烈な本州文化の影響のもとに成立する。その背景として、奈良朝政府の東北経営の動きを見逃すわけにはいかない。擦文式文化の土器(擦文式土器)は北海道において、宮城県という栗岡ノ国分寺下層式の系統の土師器を基にして成立するし、堅穴住居址も当時の本州一般のそれと同様に一辺に造りつけのカマドをもつ隅丸方形のものとなる。鉄器も普及して、石器はほぼ完全に姿を消す。機織技術も一般化し、アワ、ヒエ、モロコシ、ムギ、ソバ等の農耕も行なわれるようになる。遺跡の立地は河川をさか上った河岸である。

オホーツク文化は、海岸部に遺跡が立地する海洋性文化である。各種の回転離頭銛、釣針等の骨角製漁撈具が豊富に残されており、石器の使用もまだまだ多い。堅穴住居址の形態も六角形を基本とする大型の特異なものである。オホーツク文化の担い手に<sup>29)</sup>については、かつてアリュート人、エスキモー人等の説が述べられたことがあったが、近年、山口敏博士は、ウリチ、ギリヤーク、樺太アイヌ等、樺太から

黒竜江下流地方に住む人々との類似性を指摘された。そして、その後は、その方面の諸民族（黒水靺鞨等の歴史上の民族も含めて）に担い手を求めようとする動向が注目される。

先にも少し触れたが、擦文式・オホーツク両文化は、そのほとんどの時期において棲み分け的に併存した。ただし、鈴谷式土器の文化がオホーツク文化に属するとするならばオホーツク文化がいち早く始まったと言えるし、鈴谷式土器文化を統縄文式文化の一部として、次の十和田式土器の段階からオホーツク文化であるとするならば両文化はほぼ同時に始まったとみなし得る。そして、擦文式文化の後半期、オホーツク文化の土器——オホーツク式土器——で言うならば貼付式浮文（通称ソーメン文様）の後半期に両者は盛んに接触し融合する。その結果、おそらくオホーツク文化は、擦文式文化に吸収される形で終末を遂げたと思われる（私は、それが鉄器文化としての擦文式文化の優越性にあったと考えている）。それらの実年代は、擦文式文化の開始が八世紀後半ないし末期に、その終末は十二世紀代、おそらくは平安時代のうちにある<sup>30)</sup>と考えられる点から、オホーツク文化は、十一世紀一ぱいには終りを遂げたものと思われる。

さて、先に、北海道において江別式土器の文化圏が後世のアイヌ民族の広がりとはじめて一致する在り方を示すものと述べた。擦文式文化圏は、北海道が主体であり（ただし、知床半島には比較的稀薄である）、土器の分布は青森県の津軽・下北両半島をゆうに含む。現在の南限は南津軽郡碓が関村<sup>31)</sup>である。しかし樺太にはまだ例がなく、千島列島にも確かなものはない（ただし、南千島に擦文・オホーツク両式土器の融合形式のものは存在する）。こうした擦文式文化圏の在り方は、前記江別式土器文化圏に比較すると大幅に縮小した姿となる。しかし、少なくとも樺太や千島に擦文式文化圏が延びなかったのは、そこがいち早くオホーツク文化圏となったためと考えられる。やはり、

北海道を中心とし、一部東北地方北端にも土器の分布が延びる擦文式文化の在り方は、基本的には後世のアイヌ民族の居住圏と大きく重なり合うものであり、同じく基本的に江別式土器の文化圏を継承するものであると言える。

実は、この擦文式文化の終末年代に関しても諸説あるが<sup>32)</sup>、仮に先に私が述べた十二世紀という立場をとった場合でも、この文化の担い手はもう後世のアイヌ民族につながるであろう。アイヌ民族の祖先となった人々が何処かよりやって来て擦文式文化人を駆逐した、そして、その人々が十二世紀の頃より和歌に「エゾ人」と詠みこまれたり、『諏訪大明神画（絵）詞』に描かれたのだなどは文献史料の上からも、日本考古学の上からもとうてい考えられないからである。要するに、十二世紀頃より和歌に現われるエゾ人が今日の東北地方北端地域のエゾ人を含んでいたとしても、一方、エゾ人がアイヌの人々であるならば、後世のアイヌ民族の居住圏から考えてその中心地たる北海道の存在を無視し得ないのであり、となると、擦文式文化人はスムーズにアイヌ民族の祖先となると考えるのが一番素直な解釈ということになるのである。

さて、ここで論点を江別C<sub>2</sub>式及びD式土器の年代比定の問題に戻すこととしたい。少し先に、擦文式文化圏は江別式土器文化圏を基本的に継承するものと述べた。実は、江別式土器文化が、擦文式文化に直接的につながるものか、あるいは両者の間にもう一つ別な文化が介在するかについて、ここにも現時点では立場が分れる二つの見解が存在する。

後者の立場で間に介在する別な文化というのは、所謂「北大式土器」の文化<sup>33)</sup>である。この文化の内容は現在のところあまり明らかにされていないが、ともかく、北大式土器なるものをⅠ・Ⅱ・Ⅲに分類するのが一般的<sup>34)</sup>である。そして、その北大Ⅰ式土器が江別C<sub>2</sub>式ないしD

式土器に後続するものであることは確かである。一方、北大Ⅲ式土器は、擦文式土器を成立せしめた土師器——東北地方の国分寺下層式土器——の影響下にでき上ったものであることは確かで、初期の擦文式土器との区別を、単に口縁部の突瘤列（三、四mmの細棒で外面から内へと突き、土器の口縁内壁に円形隆起列を形成している）の存在の有無で行なう場合も多い（そうした突瘤列の存在はⅠ・Ⅱ・Ⅲ各類のいずれにも共通する特徴である。その起源は鈴谷式土器、十和田式土器を通じてもたらされた北方系要素にある。擦文式土器の系統にはまったく入りこんでいかなない要素でもある）。そして、北大Ⅱ式土器にあっても、文様構成や回転縄文の存在などに北大Ⅰ式土器を介しての江別C<sub>2</sub>式ないしD式土器との関係を認めないわけにはいかないが、一方、器形や器面調整手法などにやはり擦文式土器成立に関った前記土師器の影響をも認めないわけにはいかない<sup>35)</sup>。国分寺下層式土師器の年代は八世紀代、とくに半ばから後半にかけてが主であるとみて良いであろうから、となると、北大Ⅱ式及びⅢ式の実年代も自ずと導き出されることになる（近年、これらの北大式土器に関りを持った土師器が国分寺下層式に先行する栗圃式であるとし、したがってその年代が七世紀代にさか上る可能性がある旨の指摘<sup>36)</sup>もある。十分検討すべき提言であるが、現時点までの北海道ではそれを裏付ける資料の出土はない）。

こうしてみると、江別C<sub>2</sub>式及びD式土器に後続し、かつ北大Ⅱ式及びⅢ式土器に先行する可能性のある北大Ⅰ式土器の年代もせいぜい七世紀代後半から八世紀前半にかけてくらいのもことになる。かつて私は、この北大Ⅰ式をも含めて北大式土器というものの成立が、言い換えれば、それまでの江別式土器の伝統の流れが北大式土器に転換してしまうという大きな理由を、国分寺下層式系土師器の北海道への流入に求めた<sup>37)</sup>のであった。今でもその考えは半ば捨て切れない。

い。しかし一方で、北大Ⅰ式土器が七世紀代から始まるとする可能性にも近年強くひかれるようになってきた。その理由の一つに、北大式土器のもつ外面から内へと突く突瘤列がある。

実は、私は、江別C<sub>2</sub>式及びD式土器が北海道の枠を越えて東北地方や南千島に広まるようになったその背景に、樺太から北海道への鈴谷式土器文化人の南下の動きがあったのではないかと考える<sup>38)</sup>に至っている。その証明には江別C<sub>2</sub>式及びD式土器と鈴谷式土器との確かな共伴例がなくてはならず、そして現段階ではさほど確実な例があるわけでもない。しかし、私はその点、かなり蓋然性が高い<sup>39)</sup>と信じている（突瘤列の出現も江別C<sub>2</sub>式及びD式土器においてわずかに出現し始め、北大式土器で一般的特徴となるのである）。と言うわけで、北大Ⅰ式土器の成立が鈴谷式土器文化人の南下に伴なう文化衝撃の結果であり、また、先にみたようにその年代も七世紀代に入り得るとしたいわけである。先に私は、斉明紀阿倍比羅夫北征記事の肅慎も鈴谷式土器文化の南下の反映ではないかとも述べたが、それは以上種々記してきたような諸点から帰結したものである。

さて、これまで種々述べてきたが、要するに、もし江別式土器文化と擦文式文化の中間に北大式土器の文化が介在したとしても、それは基本的には江別・擦文両文化圏の推移の上には何ら障害となるものではなく、それぞれ一系のものとして継続していくものである。そして、それらが、後世のアイヌの居住圏にも連なるものであり、端的に言えばそれら各々がアイヌの祖先文化の一過程をなすものだと言う結論に達せざるを得ないのである。

なおもう一言を述べるならば、考古学的にみて少なくとも北海道一円が一つの文化圏にまとまるようになる（それがいかなる理由に基づくものかは、今後の大きな課題である）その以前に、道南部と道東・道北部とが二つの文化圏に分れていたことはすでに記した。そうした



場合、血統的にそのいずれの方の文化の担い手が後世のアイヌ民族につながる主流となるものであろうか。この点については、まだ十分な資料があるとは言えないようであるが、それぞれの文化圏内出土の縄文式時代人々骨はそれぞれの地域の後世アイヌに強く類似するという形質人類学側の指摘がある<sup>40)</sup>ことを紹介するとどめたい。

## 4

以上、非常に雑駁ながら縄文式文化期から擦文式文化期に亘る北海道考古学の状態を私なりの年代観と共に概略を述べてみた。そして、その中で、斉明紀阿倍比羅夫記事中の肅慎についての私見にも触れてみた。では、同記事中の蝦夷、とくに渡嶋の蝦夷は北海道考古学に照していずれの文化期の人々とするべきであらうか。

これについては、すでに種々述べてきた観点から江別式土器文化人、とくにC<sub>2</sub>式及びD式土器を有した時期の人々であったとするのが妥当だと思われる。そして、その人々は北海道アイヌの祖先ということにもなるわけである。さらに、江別式C<sub>2</sub>及びD式土器が東北地方北半に広く及んでいることも述べたが、斉明紀の道奥の蝦夷も、そうした江別C<sub>2</sub>式土器、D式土器の保有者であった可能性がはなはだ強いと考えるのである。東北地方北半にアイヌ語地名が多く残っている<sup>41)</sup>ことは周知の通りであるが、この事実が、今ここに述べた点と密接に関る<sup>42)</sup>ことではあるまいか。

改めて言うまでもないが、八世紀代（奈良時代）において東北地方北半は蝦夷の地であった。そして、江別C<sub>2</sub>式及びD式土器の分布の南限は、管見の限りでは太平洋側で宮城県多賀城市の山王遺跡<sup>43)</sup>であり、奥羽山脈の西側では山形県の寒河江市<sup>44)</sup>である。そうした分布は、天平年間に設置された対蝦夷用城柵を結んだ線から導かれる蝦夷の居住

範囲と大むね一致する。私は、やはり蝦夷と呼ばれた人々即ちアイヌ系の人々として差し支えないのではないかと考える。

『続日本紀』天平九年四月条に、持節大使藤原麻呂、鎮守將軍大野東人らによる多賀城を基地としての蝦夷の地の開拓経営策に関連して、蝦夷を慰諭鎮撫する役となった田夷遠田君雄人及び帰服狄和我君計安墨という二人の蝦夷の名がみえる。両者のうち、今ここで取り上げたのは和我君計安墨である。と言うのは、おそらくこの人物は今日の岩手県の和賀郡に出自をもつ蝦夷であらうが、その和賀郡（もちろん、前記諸城柵を結ぶ線よりはるか北方である）は猫谷地古墳群、五条丸古墳群などの末期古墳<sup>45)</sup>の残されている土地であり、またそれらの近くに同時期の竪穴住居址<sup>46)</sup>も多数発見されている所である。そして、こうした諸遺跡は年代の上からその地域の蝦夷の残したものであることは疑いを容れない<sup>47)</sup>。

しかしながら、それらの古墳や竪穴住居址の内容や出土遺物は、前記諸城柵を結んだ線より南の、即ち、当時の和人の文化とまったく異ならないということを一方では指摘し得る。もし、それらの蝦夷の人々がアイヌ系で、かつ江別C<sub>2</sub>式あるいはD式土器を使用した人々の子孫であるとしたならば、その点をどう理解すべきであらうか。このことについて私は、対蝦夷用諸城柵設置に象徴される和人の政治的進出（それは当然、文物面における諸影響をも伴ったであろう）の動きが、蝦夷の社会に大きな文化的変容をもたらした結果なのだと考えるのである。こうした一大変革を遂げさせる程の影響の強さは何も東北地方北半に限ったことではなかったのであって、津軽海峡を越えて北海道地域にまでも押し寄せ、すでに見た如くに擦文式文化を成立させ、かつ明らかに古墳<sup>48)</sup>をも残さしめたのであった。

そうしてみると、その時の文化の上での大きく強い和風化の動きというのは、東北地方北半とさらに北海道をも包括する一連の流れとし

て捉えるべきもの<sup>49)</sup>となる。ただし、北海道が独自の擦文式文化圏を結局は成立させるのは、東北地方と北海道というそれぞれの在来伝統に根ざした地域差がやはり厳然と存在していたことによるのだという点もまた認めなければならぬであろう。

## 註

- 1 桜井清彦『アイヌ秘史』(東京、昭和四十二年)、一八〇—二二頁。北構保男『アイヌ史断想』(札幌、昭和六十年)、一八〇—二六頁。田名網宏『古代蝦夷とアイヌ』(古代史談話会編『蝦夷』所収、東京、昭和三十一年)。その他。
- 2 松下大三郎編『統国歌大観』(東京、昭和十七年〔第三版])所収の『左京大夫顕輔卿集』。
- 3 例えば、金田一京助『蝦夷と日高見国』及び『アイヌ文化と日本文化との交渉』(ともに、『アイヌ文化志』〔『金田一京助選集』Ⅱ〕所収、東京、昭和三十六年)。その他。
- 4 例えば、高橋富雄『蝦夷』(東京、昭和三十八年)、一八〇—三四頁。その他。
- 5 金田一京助博士は、註3の論文の中で、アイヌ語の側での変化に対応したものであろうことを述べておられる。
- 6 これらの地名の他に、胆振鉏、肉入籠、問免が見える。胆振鉏の蝦夷は、津軽の蝦夷と分けて書かれているところから津軽半島の北端かあるいはもう北海道内に求むべきと思われる。他の二者は北海道内であろう。
- 7 こうした諸説については、児玉作左衛門『阿倍比羅夫の渡島遠征に関する諸問題』(『北方文化研究』第3・4号掲載、札幌、昭和四十三年・四十五年)、に詳しい。
- 8 以下に私が述べようとしている諸点も、すでに諸先学によって種々論じられている面が多々ある。しかし、ここでは私が特に論じたい点をあえて取り上げてみた。
- 9 齊明紀阿倍比羅夫記事には、常に阿倍比羅夫、あるいは阿倍引田臣比羅夫とフルネームで書かれているわけではなく、単に「阿倍臣」あるいは「阿倍臣<sup>名</sup>」とする記載もまま見られる。これについては、『書紀』の編者が参照した家記等の原史料に原因があるともみるべきで、本来は阿倍比羅夫同一人を指すとして良い、との坂本太郎博士の指摘がある(『日本書紀と蝦夷』〔註1前掲『蝦夷』所収])。
- 10 新野直吉博士も阿倍比羅夫の航海を津軽海峡を含む海域での阿倍水軍の定期演習的行動であるとし、当時の緊迫する半島情勢との関りを説いておられる(新野直吉『阿倍比羅夫北航の謎』〔『歴史読本』昭和五十八年臨時増刊号掲載、東京、昭和五十八年])。
- 11 海保嶺夫編『中世蝦夷史料』(東京、昭和五十八年)、一〇二—一〇三頁。
- 12 児玉、註7前掲論文第四号、七二—七三頁。新野直吉・山田秀三編『北方の古代文化』(東京、昭和四十九年)、二五九頁。その他。
- 13 海保嶺夫『近世の北海道』(東京、昭和五十四年)、八九頁。
- 14 アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』(上)(東京、昭和四十四年)、三—一七頁。
- 15 宮塚義人『縄文文化黎明期の北海道』(野村崇編『北海道の研究』Ⅰ〔考古篇Ⅰ〕所収、大阪、昭和五十九年)。吉崎昌一『縄文文化の発展と地域性 北海道』(『日本の考古学』Ⅱ〔縄文時代〕所収、東京、昭和四十年)。その他。
- 16 菊池徹夫『北方考古学の研究』(人類史叢書Ⅰ)(東京、昭和五十九年)、三四—五三頁。その他。
- 17 石附喜三男『弥生時代の北方文化』(『考古学ジャーナル』第二四八号掲載、東京、昭和五十年)。
- 18 河野広道『網走市史』(先史時代篇)(網走、昭和三十三年)、一〇六—一一〇頁。
- 19 園部真幸他『元江別Ⅰ遺跡』(高橋正勝他『元江別遺跡群』〔『江別市文化財調査報告書』Ⅻ所収、江別、昭和五十八年])。
- 20 菊池、註16前掲論文。その他。
- 21 高橋正勝他『江別太遺跡』(『江別市文化財調査報告書』Ⅹ所収、江別、

- 昭和五十四年)。直井孝一他『大麻6・旧豊平川河畔』（『江別市文化財調査報告書』XVI所収、江別、昭和五十八年）。
- 22 石附喜三男『江別式土器』の終末年代と所謂「北大式土器」1（『札幌大学紀要』第五号掲載、札幌、昭和四十八年）。
- 23 吉崎昌一『北辺』（江上波夫他『考古学ゼミナール』所収、東京、昭和五十一年）。佐藤信行『宮城県内の北海道系遺物』（『北奥古代文化』第十四号掲載、東京、昭和五十八年）。伊東信雄『東北古代文化の研究——私の考古学研究——』（『文化』第三十五卷第一・二合併号掲載、仙台、昭和四十六年）。その他。
- 24 石附喜三男『鈴谷式土器の南下と江別式土器』（『北海道考古学』第十二号掲載、札幌、昭和五十一年）。同『考古学からみた「肅慎」』（大林太良編『蝦夷』所収、東京、昭和五十四年）。なお、札幌駅北口の資料は、札幌市教育委員会の昭和五十九年度発掘による。
- 25 天野哲也『極東民族史におけるオホーツク文化の位置』（上）（『考古学研究』第二十三巻第四号掲載、岡山、昭和五十二年）。
- 26 前田潮・天野哲也『オホーツク文化の展開と地域性』（大井晴男編『ジウムオホーツク文化の諸問題』所収、東京、昭和五十七年）中の前田潮見解等。
- 27 石附、註24前掲論文。また、年代比定に関してはなお後述する。
- 28 藤本強『擦文文化』（東京、昭和五十七年）。石附喜三男『鉄文化のはじまり』（東京、昭和六十年）。その他。
- 29 石附喜三男『北海道における土器文化の終焉と付随する諸問題』（『地方史研究』第一六二号掲載、東京、昭和五十四年）。
- 30 石附喜三男『擦文式文化における東北地方』（『角田文衛博士 古代学叢論』所収、京都、昭和五十八年）。これに述べた見解は、道南松前町の札前遺跡の調査によってより補強された（久保泰他『札前』所収、松前町、昭和六十年）。
- 31 石附、註30前掲論文。
- 32 石附、註29前掲論文。
- 33 千代肇『北海道の縄文文化と編年について』（『北海道考古学』第一輯掲載、札幌、昭和四十年）。その他。
- 34 森田知忠『北海道の縄文文化』（『古代文化』第十九巻第二号掲載、京都、昭和四十二年）。
- 35 石附喜三男『擦文式土器の編年的研究』（石附喜三男編『北海道の研究』2（『考古学篇Ⅱ』）所収、大阪、昭和五十九年）。
- 36 高橋信雄『東北北部の土師器と古代北海道系土器の対比』（『北奥古代文化』第十三号掲載、東京、昭和五十六年）。
- 37 石附喜三男『擦文式土器の初現的形態に関する研究』（『札幌大学紀要 教養部論集』1所収、札幌、昭和四十三年）。もっとも、この段階においては栗罎式という名称を用いているが、その後の検討から国分寺下層式の方が適切と判断している（石附、註35前掲論文参照）。
- 38 石附、註24前掲論文。
- 39 札幌市教育委員会による昭和五十九年度札幌駅北口遺跡発掘調査でもこうした同伴関係を思わせる出土例があった。
- 40 峰山巖・山口敏『第一編 先史時代』（『豊浦町史』）所収、豊浦町、昭和四十七年）、一二〇、一二三頁。埴原和郎『自然人類学からみたアイヌ』（『中央公論』昭和五十七年十二月号掲載、東京、昭和五十七年）。その他。
- 41 山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』（札幌、昭和三十一年）。同『アイヌ語族の居住範囲』（新野・山田、註12前掲書所収）。その他。
- 42 伊東信雄博士は、註23に掲げた論文ですでにこのことを述べておられる。
- 43 高倉敏明編『山王・高崎遺跡発掘調査概報』（多賀城、昭和五十六年）。
- 44 佐藤信行『寒河江中学校所蔵の後北D式土器』（『村山考古』第十七号掲載、河北町、昭和三十八年）。
- 45 滝口宏他『猫谷地古墳調査報告』（『岩手史学研究』第九号掲載、盛岡、昭和二十六年）。伊東信雄・板橋源『五条丸古墳群——和賀郡江釣子村所——』（『岩手県文化財報告』11所収、盛岡、昭和三十八年）。
- 46 林謙作他『猫谷地遺跡』（『岩手県文化財調査報告書』第七十一集所収、盛岡、昭和五十七年）。
- 47 このことは、伊東・板橋両氏らによる註45の五条丸古墳群の報告書にお

いてもすでに考察されている。

48 石附喜三男『北海道における八世紀前後の墳墓とその系』（『古代学』第十四卷第三号掲載、京都、昭和四十三年）。同『北海道における末期古墳と問題点』（『古代学研究』第六十四号掲載、大阪、昭和四十七年）。その他。

49 石附、註37及び同、註48前掲論文。その他。

付記 本稿の註の記載に当って、引用文献が非常に多きに亘るため、できるだけ概括的なものをまず掲げること努めた。この点、御諒承を得たいと考える。

註 『古代文化』三十八卷二号（昭和六十一年二月、京都）所収。